

# 正倉院年報

## 一 古裂の整理

昭和二十八年度の古裂整理は措布屏風袋の修理を主とした。その修理を完了したものは左のとほりである。

一、措布屏風袋第五十二號—第五十九號 八口

表面に褐色の摺文様ある恰の布袋である。各々残破甚しく新布を補つて復原修理した。

一口第五十二號 墨書「山水 山水夾<sup>(細)</sup>冊」<sup>(細)</sup>「郷戸主中嶋連五百足庸布<sup>(細)</sup>壹<sup>(段)</sup>」位下 天平勝寶<sup>(四カ)</sup>四年<sup>(十カ)</sup>月<sup>(十カ)</sup>「(國印三顆)」<sup>(細)</sup>「少部正嶋」

中庸布壹段 主當 國司 郡司 「相模國」(國印一顆)

一口第五十三號 墨書「山水 鳥形冊八」(圖版第三)

一口第五十四號 墨書「山水 山水夾<sup>(細)</sup>冊」<sup>(細)</sup>「占部馬麻呂」

一口第五十五號 墨書「山水」<sup>(庵)</sup>「室」<sup>(草木)</sup>「鶴廿二 鳥形」<sup>(細)</sup>「矢田部咋万呂」

「郷戸主」井部古猪庸布壹段 主當國司史生從八位下佐味朝臣比奈麿 郡司少領外正八位下勲十二等杖部直

「戸主」井や古猪」(武藏國印二顆)

一口第五十六號

一口第五十七號 墨書「鳥毛帖」<sup>(成)</sup>「文書」<sup>(成)</sup>「矢田部咋万呂」

一口第五十八號 墨書「鳥毛立女」<sup>(細)</sup>「(圖版第三)」  
一口第五十九號 墨書「郷戸」忍人一段「天平勝寶四年」

一、措布屏風袋殘闕

其一 墨書「藤綱七十」

其二 墨書「矢田部咋万呂」

其三 墨書「綱綱一」<sup>(細)</sup>「占部」<sup>(細)</sup>

其四 墨書「紫地藤綱」<sup>(細)</sup>「六十」<sup>(五カ)</sup>「天平勝寶四年」(國印一顆)

其五 墨書「鳥形十七」

其六 墨書「鳥形」<sup>(細)</sup>「矢田部咋」<sup>(万呂)</sup>

其七 墨書「夾綱山水 冊二」

其八 墨書「鹿形冊八」<sup>(細)</sup>「占部馬麻呂」

其九 墨書「瀝鳥形」

以上は何れも献物帳所載の屏風の袋であつて、寶庫北倉にある鳥毛立女屏風及び鳥毛帖成文書屏風等の袋も新たに發見されたものである。

其十 墨書「葛樹」形及「鳥」越後國久正郡夷守郷戸主肥人皆麻

呂庸布壹段 天<sup>(平)</sup>勝<sup>(平)</sup>「(國印二顆)」(圖版第四)

右殘闕は措布の圖様が異り献物帳所載の屏風袋ではない。この圖様と同種の屏風袋が三口今北倉に存する。その日附によれば天平勝寶五年

三月廿九日仁王會の調度であつた屏風の袋であることが認められる。

この殘闕は丁度日附の部分を開くが仁王會屏風袋に擬すべきであらう。

## 一、軸装古裂 九卷第二四一號—第二四九號

揩布屏風袋殘片百四十七片を分貼した。

## 二 聖語藏經卷修理

聖語藏經卷はもと東大寺塔中尊勝院にその經藏と共に伝來したものである。尊勝院は村上天皇の天徳四年の創建にかゝり、後治承の乱に焼失、再建後また永祿の兵燹により堂宇悉く焼失して、唯一字の經藏のみを遺した。その經藏を聖語藏と称し東大寺において管理して來たが、明治二十六年、經卷經藏を併せて帝室に獻納せんことを同寺から願ひでた。宮内省は之を受理して、經藏を正倉院構内宝庫南方の地に移建して、旧に因り聖語藏と称した。

聖語藏は本瓦葺四注造の校倉であつて、間口十九尺、奥行十五尺二寸、床下の高さは四尺で、内部には校壁全体にわたり棚架を設け、經箱を置く。本倉の建築年代については定説がないが鎌倉初期を下らない時代の建築と推定せられる。

納むる所の經卷は四千九百六拾餘卷であつて、中国隋唐の写經を初め、奈良平安鎌倉に亘る我が国の写經及び宋版、寛治版等の摺經をも含み、一切經として有名であるばかりでなく、經文に付せられたる平安初

期の古訓点は、国語史上重要な資料として注目せられるものである。

聖語藏經卷の修理事業は明治四十三年始めて經卷修理及び保管の順序を定め、爾來毎年若干の經卷を出藏して修理を加へ、その完了したものは既に二千七百九十餘卷に達した。戦後一時中止の已むなきに至つたが本年度より再び業を継ぐこととした。本年度その修理を完了したものは左のとほりである。

### 一、乙種写經 大方廣佛華嚴經百四十卷の内二十二卷 第十五号

卷一 卷一、卷二 卷二 卷三 卷四 卷五 卷五  
卷五 卷五 卷五 卷六 卷六 卷六 卷七 卷八  
卷八 卷八

右は鎌倉時代の書写にかゝり、曾て整理の際大方廣佛華嚴經として一括に処理せられたものであるが、再査するに八十卷本（新訳）六十卷本（旧訳）四十卷本の各大方廣佛華嚴經及び他經が彼此混淆せることが明らかに、また同種本ではあるが、類を異にするもの等があつたので、各々分類整理して修理した。その結果左のとほりとなつた。

### 一、大方廣佛華嚴經（新訳） 黄紙、縹色表紙、黒漆軸

卷一 奥書「貞永二年正月廿三日申時許交合了 淨弁」

### 「一交了」（図版第五）

卷二 奥書「一交了」 卷三 奥書「一交了」  
卷四 奥書「一交了」 卷五 奥書「一交了」  
卷七 奥書「一交了」 卷八 奥書「一交了」

一、大方廣佛華嚴經(新訳) 白紙、褐色表紙、朱頂軸

卷五 奥書「承久四年卯月十六日一交了」

一、大方廣佛華嚴經(新訳) 黄紙、軸新補

卷五 奥書「一交了」

一、大方廣佛華嚴經(旧訳) 白紙、茶色表紙、黒漆軸

卷二 背各継目に花押あり

卷四 奥書「建武四年六月十五日爲結縁以老眼不顧惡筆書寫之畢 権

律師覺聖<sup>年六十三</sup><sub>夏臨四十七</sub>「同年月日一交畢」(図版第五)

卷五 奥書「徳治二年二月廿九日於東大寺三面僧房西室実相院付□切

句畢 覺聖」

卷六

一、大方廣佛華嚴經(旧訳) 黄紙、表紙新補、朱頂軸

卷六 奥書「一交了」 卷八 奥書「一交了」

一、大方廣佛華嚴經(旧訳) 白紙、茶色表紙、黒漆軸

卷六 奥書「一交了」 卷七 奥書「一交了」

一、大方廣佛華嚴經(四十卷本) 白紙、褐色表紙、黒漆軸

卷二 奥書「一交了又交了」 紙背処々に花押あり。

卷六 紙背書「弘安元年<sup>戊寅</sup>五月十五日<sup>申時</sup>於香山寺法□□合清□疏奉讀

之畢 前権僧正宗性」 奥書「一校了二交了」 紙背処々に花押、又

卷尾背に㊦の黒印あり。

卷八 奥書「一校了二交了」 紙背継目に花押あり。

一、大方廣佛華嚴經(四十卷本) 黄紙、軸新補

卷五

一、佛華嚴入如来徳智不思議境界經卷上 一卷

黄紙、橡表紙、軸新補、奥書「一交了」 紙背に「佛」の黒印あり。

右一卷は聖語藏經卷目錄に大方廣佛華嚴經卷一とあるが、再査するに別種の経卷であることが明らかとなつた。蓋し当初分類の際誤つて混入したものであらう。

### 三 御物の特別調査

#### (1) 密陀絵調査

去る昭和二十五年より大阪学芸大学教授上村六郎、東北大学教授亀田孜、大阪大学教授木村康一、漆芸家北村久造、名古屋大学教授山崎一雄氏等に依頼して行はれた密陀絵調査は本年を以て完了した。その調査報告は本身に掲載されてゐる。

#### (2) 髹漆品調査

宝庫に蔵する髹漆品は其の数夥しく、奈良時代髹漆工芸の有ゆる技法を網羅するものと謂はれる。この調査においては、主に漆皮箱を中心とした漆工品の製作過程及び技法を審らかにせんとするものである。東京芸術大学教授松田権六、文化財専門審議会委員吉野富雄、東京国立博物館美術工芸課長溝口三郎、同漆工室長岡田譲、漆芸家北村久造の諸氏に

依嘱して本年度より三ヶ年の予定を以て始められた。

#### イ 材質調査

この調査は、従来の調査において材質未決定のものについて行ふものであつて、材質を決定して御物台帳作成に資せんとするものであるが、兼ねてその産地が究明せられるならば、その文化史に寄与するところは少くないであらう。材質調査は動物植物鉱物の各分野に亘り夫々専門家に依嘱して、本年度より三ヶ年の予定を以て行ふことになった。依嘱者は左のとほりである。

#### 動物質

農林省輸出品検査所畜産課長

国立科学博物館動物学課長

慶応義塾大学助教授

山階鳥類研究所長

石渡達六郎

瀧 庸

森 八郎

山階芳麿

#### 植物質

関東学院大学教授

お茶の水女子大学教授

奈良女子大学教授

東京大学理学部講師

#### 鉱物質

国立科学博物館事業部長

京都薬科大学講師

名古屋大学教授

科学研究所主任研究員

大賀一郎

大槻虎男

小清水卓二

亘理俊次

朝比奈貞一

益富壽之助

山崎一雄

山崎文男

#### 四 正倉院評議會

昭和二十八年度においては、七月二日に第十二回の會議を開催、修理室の建築、本年の曝涼、奈良国立博物館へ御物貸出、宝庫内の特別観覧、御物の特別調査及び研磨後の刀劍の手入に関するにつき審議した。